# 卒業後の歩み

看護学科第 32 期卒業生　小野　敬代

早いもので、卒業して 11 年が経ちます。

仕事、家事、育児をしながらの学生生活は想像していた以上に過酷で、大きな壁に直面することもありましたが、家族や同じ目標を持つ仲間、先生方の支えがあり、目標を見失わずに乗り越えることができました。

看護の知識だけでなく、一人の人間として学ぶことも多く、３年間の学生生活は、私の人生にとってかけがえのない貴重な時間となり、あの頃の思い出や仲間の存在は、今もなお、心の支えとなっています。

私は卒業してから、一般病棟、療養病棟を経験した後、資格取得前から興味のあった緩和ケア病棟に勤務しました。

専門性が高く、患者様やご家族とじっくり向き合う中で、コミュニケーションスキルが求められる難しい面もありましたが、死を迎える瞬間までその人らしさを支える看護はやりがいがあり、最期まで一人の人間として生き抜く姿から、死生観や人生に対する考え方にも強く影響を受けた気がします。

ストレスや行き場のない感情をぶつけられ、理不尽な思いをすることもありますが、患者様やご家族から「ありがとう」と感謝される度に励みになっています。

緩和ケアでは、理想と現実のギャップを感じることや、多くの看取りに関わり、自分自身のメンタルが崩れそうになることもありましたが、看護師として、人としてもさらに成長することができました。

働き始めて思うことは、学校で学んだことはほんの一部だということです。医療は日々進歩している上に、個別性のある看護という点では、患者様から学ぶことも多く、この仕事を続ける限り、勉強に終わりはないと感じています。今後も、患者様やご家族に寄り添い、できることを一つ一つ積み重ね、自分の看護を成長させていきたいと思っています。

看護師として経験を積んだ今でも、業務量の多さや責任感、プレッシャーなどから挫けそうになることがありますが、そんな時は、理想とする看護師像や看護観、看護師を目指した理由を思い出すようにしています。

学生の皆さんにも、看護師を選択して良かったと思える３年間にしてほしいと思います。